

1. 研究活動

(1) 開催学会

地理学科のスタッフが関係して駒澤大学で開催された学会は表 2-1-1 のとおりである（例会・研究会のような小規模のものは除く）。日本地理学会，歴史地理学会，経済地理学会，日本第四紀学会などが開催されている。

表 2-1-1 開催学会一覧

年月日	学会名	備考
1961.4.22～4.26	日本地理学会	4.24～4.26 は巡検
1964.2.1～2.2	日本第四紀学会	
1967.4.2～4.3	経済地理学会	4.3 は東京都立大学で開催
1972.3.31～4.1	歴史地理学会	4.1 は巡検
1972.4.1～4.5	日本地理学会	4.1 は評議員会，4.4～4.5 は巡検
1983.8.29～8.31	International Symposium on Coastal Evolution in the Holocene	
1985.4.21～4.22	歴史地理学会	4.22 は巡検
1989.6.24～6.25	日本水文科学会	
1991.4.2～4.6	日本地理学会	4.2 は評議員会，4.5～4.6 は巡検
1992.5.16～5.17	日本地下水学会	
1992.9.13～9.17	日本第四紀学会	9.16～9.17 は巡検
1994.7.25～7.27	日本国際地図学会	7.27 は巡検
1995.1.20～1.21	「海岸・沿岸域研究を考える」シンポジウム	
1995.6.3～6.5	歴史地理学会	6.5 は巡検
1996.6.14～6.16	日本水文科学会	6.14 は評議員会
2000.6.3～6.5	経済地理学会	6.5 は巡検

関係学会誌記事，プログラムなどより作成

(2) 在外研究

駒澤大学には公費在外研究（昭和 52 年制定）の制度があり，文学部としての上限人数があるが，その枠内で地理学科のスタッフもしばしば国内・国外の研究機関に出かけている。この制度のおかげで，現在の専任スタッフは，着任後まもない教員を除いて，ほとんど全員が留学（国内を含む）している。これまでに留学した教員の留学期間・留学先等は後掲の表 3-2-4 のとおりである（旧規

程による海外留学生を含む)。

(3) 研究助成金の受け入れ

駒澤大学には特別研究助成(昭和54年制定)、特別研究出版助成(昭和56年制定)の制度があり、大学全体としての上限金額があるが、地理学科スタッフもこれをよく利用している。これまでの実績は後掲の表3-2-5、3-2-6のとおりである。

また、財団等の助成金で大学に通知があったものは表3-2-7、文部科学省(旧文部省)の科学研究費補助金の採択実績は表3-2-8のとおりである。

(4) 専任教員の研究活動

歴史地理科創設以来75年の歴史の中で、駒澤大学では多くの地理学教員が教鞭をとった。以下においては、専任教員の研究活動を、本学在職当時の著書・論文・取得学位を中心にして述べていく(著書、学内誌掲載論文を優先して挙げる)。取り上げる教員の範囲は、歴史地理科、地理歴史学科、地理学科所属の地理学専任教員にとどまらず、北海道教養部、自然科学教室、経済学部所属の専任教員で地理学を専門とする者も含めた。このほかに、地理学が本来の専門ではないが、一時期卒業論文の指導を担当し、大学院の講義も受け持った専任教員に宮部直巳、大森五郎(ともに自然科学教室所属)がいる。現在存命の方は、生年の月日を省略した。

ただし、1960年代まで専任教員と兼任教員の境目はあいまいであった。たとえば、教職員住所録では、昭和40年度版まで専任と兼任の区別がなかったし、多田文男は『駒澤地理』第1号(1958年)の「創刊のこぼし」の中で、内田寛一や青野寿郎、渡辺光がかつて駒澤大学の教授だったと述べているが、これは兼任である。したがって、スタッフによっては専任としての在籍期間がはっきりしない場合がある。なお、「兼任講師」が「非常勤講師」という呼称に変わるのは、教職員住所録では昭和52年度版からである。

資料は、人事部の記録(ただし、古い時代の記録はほとんどない)、過去の教職員住所録(人事部所蔵。昭和7年度以降。ただし、昭和20年度と28年度は発行されなかったのか、人事部に所蔵されていない)、過去の授業科目担当者表、各教員の略歴・著作目録、国立情報学研究所のWebcat、国立国会図書館の蔵書検索・雑誌記事索引、MAGAZINEPLUS(日外アソシエーツの雑誌・論文情報データベース)、『駒澤大学出版各種紀要所収研究論文目録:新版』(1990年)などによっている。多田文男「駒沢大学地理学科の生い立ち」(駒澤地理14, 1978年)は貴重な記録だが、年代など細かい点では疑義のある箇所もあり、参考程度とした(以下、多田(1978)と略記)。

著書は、駒澤大学に専任教員として在職時のものを表3-2-9に示し、それ以外は本文中で補った。論文発表の場である『駒澤地理』、『地域学研究』の目次は、後掲の表3-2-10、表3-2-11のとおりである。『駒澤大学文学部研究紀要』など、それ以外の学内雑誌に掲載された地理学論文は、表3-2-12にまとめた(専任教員以外の論文を含む)。

a. 地理学科の過去の専任教員

脇水鐵五郎（わきみず てつごろう）（1867.11.9～1942.8.10）

1929（昭和4）年4月、専門部歴史地理科設置とともに駒澤大学に着任している（人事部記録）。彼は1867（慶応3）年生まれであるから、着任時61歳であった。1930（昭和5）年5月現在の『駒澤大学一覧』では教授となっており、東京帝国大学教授の経歴からしても、当初から教授であったろう。1942（昭和17）年8月、在職中に逝去。

国立情報学研究所のWebcatには多くの著書が挙げられているが、さまざまな版の鉱物学の教科書が多い。駒澤大学に就任した1929年以後の著作では、地質・鉱物関係の啓蒙書以外に、1939年に河出書房から刊行された『日本風景誌』が目につく。1942年の没後も著書が出版されている。学内の紀要類では、戦前に1冊のみ出た『駒澤大学学报』第1輯に「わが国土の再検討」が、『駒澤地歴学会誌』第2号に「日本の自然と文化」が掲載されている。

脇水に関する文献として、赤坂信・石川忠治「脇水鉄五郎の風景論」（ランドスケープ研究59(5), 1996年）がある。

濱田眞名二（1875.2.21～？）

1930（昭和5）年6月採用と本学人事部の記録にはあるが、同年5月現在という『駒澤大学一覧』には教授として名前が出ている。1875（明治8）年生まれで、着任時55歳。経歴は不詳で、多田（1978）は「東京高等師範学校の卒業生であったと伝えられている」と記すが、1911（明治44）年の『東京高等師範学校要覧』に掲載されている過去の卒業生名簿には名前がない。『駒澤大学一覧』の教員名簿では「学士」の称号がついておらず、（旧制）大学の出身ではないようである。多田（1978）によれば、1941（昭和16）年ごろに退任し、その後まもなく逝去したという。本学の教職員住所録でも、昭和16年度版まで名前が出ている。

著書の存否は不明で、『地理学評論』にも論文は掲載されていない。『駒澤地歴学会誌』創刊号と第2号に「日本の面積」と「大日本の国号」という論文がある程度である。同誌第3号の「地歴科の生立ち」は、3ページの短いものだが、卒業生への中等教員無試験検定資格付与の経緯について記した貴重な記録である。

綿貫勇彦（わたぬき いさひこ）（1892.5.17～1943.6.23）

1931（昭和6）年4月に駒澤大学に着任（人事部記録）。下記の「年譜」には教授とある。1932（昭和7）年10月の「駒澤大学新聞」第16号でも教授の肩書きがついている。1943（昭和18）年6月、在職中に逝去。

著書は、地理学方法論や集落地理学に関するものが数冊ある。とくに1933年の『聚落地理学』は、没後も増補版が発行された代表作である。論文は『駒澤地歴学会誌』にも「歴史地理学の方法」（1938

年) など 2 本あるが、『地理学評論』などの学術雑誌に多数の論考を発表している。

綿貫に関する文献として、今朝洞重美「法政大学地理学教室初期における 2 人の地理学者—綿貫勇彦教授と井上修次教授について—」(三井嘉都夫教授還暦記念事業会編『環境科学の諸断面: 三井教授還暦記念論文集』土木工学社, 1982 年)がある。また、『聚落地理学 増補版』の末尾には「綿貫勇彦年譜」と「著作目録」がある。

北田宏蔵 (きただ こうぞう) (1899.1.15~1958.12.28)

綿貫と同じく, 1931 (昭和 6) 年 4 月に着任 (人事部記録)。1932 (昭和 7) 年 10 月の「駒澤大学新聞」第 16 号では講師となっているが, 1936 (昭和 11) 年度版の『駒澤大学一覧』では教授である。多田 (1978) によれば, 「昭和 20 年日本地図会社創立と共に, これに移籍されて研究と経営とに当る事となり, 駒沢大学を退いた」という。「日本地図会社」とは日本地図株式会社 (後の日地出版) のことであるが, 国立情報学研究所や国会図書館などの書誌データベースによれば, 日本地図株式会社は 1944 (昭和 19) 年秋には地図を刊行しており, 移籍の年は 1944 年の可能性もある。本学の教職員住所録では, 昭和 19 年度版まで名前があるが, 昭和 20 年度版が見当たらないので, 昭和 20 年度に在籍したかどうかは不明である。1958 年逝去。

著作は多い。本学着任以前にもすでに『大陸漂移説解義』(1926 年), 『数理地理学』(1929 年) を刊行していたが, 就任後は地図作成法や地理学の概論書を執筆している。日地出版では, 学校用教科書や地図帳の作成にも関わっている。

北田に関する文献として, 多田文男「紙碑: 北田宏蔵 1899~1958」(地理学評論 32(2), 1959 年)がある。

井関弘太郎 (いせき ひろたろう) (1924.9.24~2002.6.27)

人事部には詳しい記録がないが, 下記の文献によれば, 1948 年 4 月に専任講師として着任, 翌年助教授, 1951 年 3 月に名古屋大学に転出している。教職員住所録, 授業科目担当者表にも, この 3 年間, 名前が見える。2002 年逝去。

在職期間が 3 年と短く, 学内の紀要も整備されていなかったため, 当時の学内誌には論文が出ていないが, 『人文地理』や『日本史研究』などに人文地理の論文を発表していた。その後の名古屋大学時代の著書には, 『三角州』(1972 年), 『沖積平野』(1983 年) などがある。

井関に関する文献として, 「井関弘太郎教授略歴・業績目録」(名古屋大学文学部研究論集 101 (史学 34), 1988 年), 海津正倫「井関弘太郎先生の御逝去を悼む」(地理学評論 76(1), 2003 年), 山田正浩「井関弘太郎先生のご逝去を悼む」(名古屋地理 16, 2003 年)がある。

井上修次 (いのうえ しゅうじ) (1909.8.22~2000.3.2)

人事部記録では, 1948 年 1 月 1 日兼任講師, 1949 年 4 月 1 日教授, 1952 年 4 月 16 日北海道大学

教授として転出している。しかし、多田（1978）は1954年に退職したと述べ、今朝洞は「井上教授は昭和^(ママ)22年から28年にいたる間地理学科主任教授」と記している（今朝洞重美「井上修次「地割の進展」について」、駒澤地理2, 1960）。一方、下記の北海道大学の文献では1952年4月北海道大学文学部教授就任とされているから、1952年度以降は兼任で、教室主任も兼任ながら務めていたと思われる。地理学教室の主任教授であったことについては、1950年度の記録もある（『駒澤大学学報』復刊第1号「彙報」）。教職員住所録と授業科目担当者表には、1948～1954年度に名前があり、これは専任・兼任をあわせての在職期間である。北海道大学を停年退官後、1973年4月より駒澤大学北海道教養部教授を2年間務めた（就任前から兼任教員として教鞭をとっていた）。2000年逝去。

単著の著書はないが、人口地理学、集落地理学などの論文がある。また、『地理学評論』に「地割の進展」という論文を発表し（1960年）、これを今朝洞が『駒澤地理』第2号で紹介している。

井上に関する文献として、今朝洞重美「法政大学地理学教室初期における2人の地理学者—綿貫勇彦教授と井上修次教授について—」（三井嘉都夫教授還暦記念事業会編『環境科学の諸断面：三井教授還暦記念論文集』土木工学社、1982年）と、北大時報No.559（平成12年10月号）の訃報がある（次のURLでウェブ上に公開されている。http://www.hokudai.ac.jp/bureau/news/jihou0010/559_32.htm）。

谷津榮壽（やつ えいじゅ）（1920～）

人事部記録では1948年4月採用、1949年4月～1954年4月助教授となっている。その後中央大学理工学部へ転出するが、1959年度まで（兼任）教員として教職員住所録と授業科目担当者表に名前が見える。1948年度が専任か兼任かは不明である。中央大学を退職後、渡米してアメリカ・カナダの大学で教鞭をとり、帰国してからは筑波大学、上越教育大学などに勤めた。

駒澤大学在職期間中の著書はないが、その後、"Rock control in geomorphology"（1966年）、"The nature of weathering"（1988年）などの著作を出している。『地理学評論』には、在職中に「常陸那珂台地の地下水（第1報）」（1950年）、「関東地方に於ける河川堆積物の予察的研究」（1951年）などの論文を発表している。

谷津に関する文献として、谷津榮壽ほか「(座談会) 戦後の地形学の歩みを語る 前編・後編」（地理42(8),(9), 1997年）がある。

入江敏夫（いりえ としお）（1922.3.22～2002.2.24）

人事部記録では1948年4月採用となっているが、教職員住所録と授業科目担当者表では、1949年度から名前がある。『駒澤大学八十年史』掲載の1948年6月現在の教員名簿にも名前が入っていない。退職は1957年11月とされるが、その間の専任・兼任の区別、肩書きは不明である。多田（1978）によれば、1949年度の新制大学文学部地理歴史学科設置に合わせて、谷津と同時に専任助教授に就いたようである（ただし、1950年度の（『駒澤大学学報』復刊第1号「彙報」には、地理学の助教授として、井関・谷津の2人だけが挙がっている）。1957年5月現在で調査され文部省に提出され

た大学教員一覧表に基づく『全国大学職員録』には助教授として掲載されているから、専任教員であったことは間違いない。教職員住所録と授業科目担当者表には、1959年度まで名前があり、人事部記録の退職年と合わないところからすると、1958年度以降は兼任だったのであろう。本学退職の後、東京経済大学に勤めた。2002年逝去。

著書の中で本学在職期間のものには、『新しい地理教室』（編著、1957年）、『新しい世界の地理』（編著、1957～1958年）の地理教科書がある。本学転出後には、『現代の人文地理学』（共著、1961年）、『現代の地理学』（編著、1963年）を著している。

入江に関する文献として、追悼文集『峰をめざして一孤高の地理学徒の歩みー』（入江敏夫先生を偲ぶ会、地理教育研究会（取扱）、2002年）、小山昌矩「入江敏夫先生を偲ぶ会を終えて」（地理教育32、2003年）がある。

井口正男（いのくち まさお）（1923～）

1953年5月採用と人事部記録にはあるが、専任・兼任の区別、肩書きなど詳しいことは不明である。授業科目担当者表には1953年度から名前がある（教職員住所録は1953年度分がなく、確認ができない）。多田（1978）によれば、谷津助教授が中央大学に移った後の後任というが、下記の文献によれば、1956年に助教授となっている。1957年5月現在の『全国大学職員録』にも助教授として掲載されている。1964年から立正大学に転出し、その翌年には東京教育大学（のち筑波大学）に移っている。

著書には、本学転出以後になるが、『漂砂と流砂の水理学』（1975年）がある。『駒澤地理』第1号にも「大井川中流部における曲流と段丘地形」という論文がある。在職中の1961年、東京文理科大学より、「河川下流部発達の一特徴」との論文で理学博士の学位を授与された。

井口に関する文献として、T. Sunamura, Retirement of Professor Masao Inokuchi (*Annual report of the Institute of Geoscience, the University of Tsukuba*, 13, 1987)がある。

大和英成（やまと ひでしげ）（1919.2.8～1973.5.30）

人事部記録によれば、1951年4月兼任講師、1955年4月専任講師、1958年4月助教授、1960年3月教授と昇格している。多田（1978）によれば、井関の退職に伴って講師として来任したという。1955年の専任講師就任は下記の文献には見えず、兼任と専任の境はあまり意識されていなかったようである（専任講師でありながら、東京大学大学院博士課程に在籍していた）。1973年5月、在職中に逝去。

研究面では、『駒澤大学研究紀要』に1956年から毎号論文を発表し、『駒澤大学文学部研究紀要』に変わってからもしばしば論文が掲載されている。また『駒澤地理』にも創刊以来、第1号の「熊本県白川下流地域における水利秩序の変更に伴う農業の変貌」（1958年）をはじめとして、毎号論考を寄せた。これらは日本各地の農業地理に関する論文で、没後『農業地域の変貌過程』（1974年）

としてまとめられている。在職中の1959年、東京大学より、「低湿地の農業地理学的研究」との論文で理学博士（課程博士）の学位を授与された。

大和に関する文献として、桜井正信「同窓の大和英成先生の逝去を悼む」（駒澤地理10, 1974年）, 「故大和英成先生略歴及び著作目録」（駒澤地理10, 1974年）, 『大和英成追悼の記』（私家版, 1974年）, 多田文男「大和英成君の逝去を悼む」（地理学評論46(8), 1973年）などがある。

桜井正信（さくらい まさのぶ）（1921～）

1952年4月専任講師, 1964年2月助教授, 1968年4月教授となり, 1994年3月退職。退職後, 名誉教授の称号が授与されている。当初は, 専任講師とはいっても実質的には兼任講師であったようであり, 多田（1978）は1957年4月現在のスタッフの中で, 桜井を「兼任講師」としている（ただし, 1957年5月現在の『全国大学職員録』には,（専任）講師として名前が出ている）。

桜井には子供向けのものも含めて多くの著書があるが, 『武蔵野：歴史と風土』（1966年）, 『歴史細見武蔵野』（1980年）など, 武蔵野の歴史地理関係のものが多い。『駒澤地理』にも2本の論文があり, また『駒澤大学宗教社会研究所報』（研究所の主任を務めていた）や『駒澤大学研究紀要』に宗教関係の論考がある。

山口岳志（やまぐち たかし）（1934.1.13～1993.4.5）

1964年4月兼任講師, 1965年10月専任講師, 1968年4月助教授。1973年7月末に退職し, 8月から北海道大学文学部に着任している（その後1975年10月に東京大学教養学部に移る）。1989～1992年度に非常勤講師として再度本学に勤めた。東京大学在職中の1993年4月逝去。

編著書として, 在職期間以後になるが, 『世界の都市システム』（1985年）などがある。『駒澤地理』, 『駒澤大学文学部研究紀要』にも, 「都市の機能に関する指標の分類と類型」（1973年）など, 都市地理学や北米研究の論文が5本掲載されている。また, 在職中の1970年, 「都市の機能に関する地理学的研究」の論文で, 東京大学より理学博士の学位を授与されている。

山口に関する文献として, 「木内信蔵先生と山口岳志先生をしのぶ一紙碑集成一」, 「山口岳志先生の履歴と主な業績」（ともに, 東京大学教養学部人文科学科紀要101, 1995年）, 井内昇「紙碑」（地理学評論66A(10), 1993年）などがある。

飯本信之（いひもと のぶゆき）（1895.3.14～1989.6.12）

お茶の水女子大学, 日本大学を経て, 1966年4月教授として着任, 1972年3月退職。その後1年間兼任教員として勤務している。1989年逝去。

研究の中心は政治地理学で, 戦前に『政治地理学』（1929年）, 『政治地理学研究』（1935～1937年）を公刊している。

飯本に関する文献として, 「飯本信之先生略歴及び著作目録」（駒澤地理9, 1973年）, 澤田清「飯

本信之先生の逝去を悼む」(地理学評論 62A(11), 1989年), 立石友男「飯本信之先生を偲ぶ」, 籠瀬良明「飯本信之―大切にされた長い生涯」, 太田晃舜「政治地理学と飯本信之先生」, 佐藤宣弘「飯本先生を偲んで」(以上, 地理誌叢 31(1) (飯本信之先生追悼号), 1989年), 「戦前の思い出―飯本信之先生に聞く」(『地理学を学ぶ』古今書院, 1986年所収)がある。

松尾俊郎 (まつお としろう) (1897.8.19~1979.7.20)

横浜国立大学を1963年3月に停年退官の後, 1966年4月教授として着任, 1973年3月退職。1973年4月からは兼任教員となり, 1976年3月まで勤めている。1979年逝去。なお, 戦後すぐの1948~1949年度, 兼任講師として教えていた時期があった。

著書には『集落・地名論考』(1963年), 『日本の地名』(1976年)などがあり, 没後も『地名の探究』(1985年)が出されている。『駒澤地理』にも, 本学着任後, 兼任教員退職まで毎号地名関係の論文を寄せている。1969年, 論文「関東山地東辺地帯における集落の人文地理学的研究」で, 駒澤大学から文学博士の学位を授与された。

松尾に関する文献として, 「松尾俊郎先生略歴」(駒澤地理 4・5, 1968年), 伊倉退蔵「松尾俊郎先生をいたむ」(地理 24(11), 1979年), 野村正七「松尾俊郎先生の逝去を悼む」(地理学評論 53(2), 1980年), 荒井貞「松尾俊郎」(『地名の世界』(『地理』1982年7月号臨時増刊号), 古今書院, 1982年), 「著者略歴」, 「著作目録」(『集落・地名論考』所収), 「地名関係著作・論文目録」(『地名の探究』所収)がある。

多田文男 (ただ ふみお) (1900.7.3~1978.3.15)

東京大学, 法政大学を経て, 1966年4月教授として着任。1978年3月, 在職中に逝去。専任教員としての勤務年数は短い, 1939年4月から駒澤大学で兼任教員として授業を担当し, 「綿貫教授病気以来, 井関・谷津助教授時代は, 兼任ながら主任の役を受持ち, 教授会にも屢々出席」したという(『駒澤地理』第14号掲載の略歴による)。1958年『駒澤地理』創刊当時の駒澤大学地理学会の会長と地理学科主任も多田が務めていた。ただし, 教職員住所録には1950~1954年度は名前がなく, 授業科目担当者表にも1949~1954年度は名前が見えないので, この期間は本学から離れていたと思われる。

著書には『自然環境の変貌』(1964年)などがあり, 『駒澤地理』をはじめとする学内雑誌にも, 「山地の潜在崩壊性と気候地形」(1970年)などの地形学論文が掲載されている。

多田に関する文献として, 「多田文男先生略歴・著作目録」(駒澤地理 8, 1972年), 「多田文男先生略歴および著作目録」(駒澤地理 14, 1978年), 長沼信夫「多田文男先生の逝去を悼む」(駒澤地理 15, 1979年), 「多田文男先生を偲ぶ」(駒澤大学大学院地理学研究 9, 1979年), 『多田文男先生を偲んで』(私家版, 1979年), 吉川虎雄「多田文男先生の逝去を悼む」(地理学評論 51(6), 1978年), 三井嘉都夫「多田文男先生の御逝去を悼む」(法政大学地理学集報 7, 1978年), 多田文男, 初

山政子（対談）「長い坂道―初山政子の対談 5」（地理 22(2), 1977 年), 酒井啓「大正期～昭和中期における多田文男の自然地理学的研究とその地理学史上の意義」（新地理 48(3), 2000 年）などがある。

西水孜郎（すがい しろう）（1904.7.31～1985.7.23）

国立国会図書館，流通経済大学を経て，1966 年 4 月教授として着任。1982 年 3 月退職。1985 年逝去。

在職中の著書として『国土計画の経過と課題』（1975 年），編著として『資料・国土計画』（1975 年）がある。『駒澤地理』にも，国土計画・開発に関する多くの論文を執筆している。

西水に関する文献として，「西水孜郎先生の略歴と業績」（駒澤地理 11, 1975 年），「西水孜郎教授の略歴と業績」（駒澤地理 18, 1982 年），初山政子「西水孜郎先生の逝去を悼む」（地理学評論 59A(2), 1986 年）がある。

上野福男（うえの ふくお）（1909.1.2～2000.5.4）

農林省農業技術研究所を経て，1966 年 4 月教授として着任。1986 年 3 月退職。退職後，名誉教授の称号が授与されている。2000 年逝去。

農業地理関係の著書・編著・訳書が多い。在職中の単著としては『高冷山村の土地利用の秩序』（1979 年）があり，退職後には『スイスのアルプ山地農業』（1988 年）を公刊した。『駒澤地理』，『文学部研究紀要』にも，多くの論文を発表している。

上野に関する文献として，「上野福男先生略歴・著作目録」（駒澤地理 6・7, 1970 年），「上野福男教授の略歴と主要業績」（駒澤地理 22, 1986 年），長野覺「上野福男先生の御逝去を悼む」（地理学評論 74A(2), 2001 年），「上野福男先生略歴」，伊村正法「上野福男先生著作リスト」（ともに，上野福男先生喜寿記念会編『農業地理学の課題』1986 年所収），「農民生活に立脚した地理学研究―上野福男先生に聞く」（『地理学を学ぶ』古今書院，1986 年所収）などがある。

菱口善美（こもぐち よしみ）（1937.1.1～1997.4.28）

1973 年 4 月，専任講師として着任。翌年助教授，1977 年教授に昇格。1997 年 4 月，在職中に逝去。

著書には，インドの農村研究である"Agricultural systems in Tamil Nadu"（1986 年）がある。本書は，1984 年にシカゴ大学に提出された Ph.D の学位論文"Agricultural systems in Tamil Nadu: A case study of Peruvalanallur village"を公刊したものである。『駒澤地理』，『地域学研究』に，南・東南アジア農村について多くの論文を書き，バングラデシュとマレーシアの研究は，没後"Transformation of rural communities in Asia"（2000 年）としてまとめられた。

菱口に関する文献として，「菱口善美教授の逝去を悼む」（地域学研究 11, 1997 年），「菱口善美教

授の逝去を悼む」(駒澤地理 34, 1998 年),「菱口善美先生を偲ぶ」(駒澤大学大学院地理学研究 26, 1998 年)がある。

小川 徹(おがわ とおる)(1914.3.31~2001.4.1)

法政大学から 1973 年 9 月教授として着任。1990 年 3 月退職。2001 年逝去。1950 年代, 60 年代にも兼任講師として本学で教鞭をとっていた。

在職中にまとめられた代表的著書として『近世沖縄の民俗史』(1987 年)がある。本書は, 1972 年に広島大学文学部に提出された学位請求論文「沖縄民俗社会の歴史地理的研究」に手を加えたものである。『駒澤地理』にも在職中・退職後に,「社会形態としての村落景観」(1994 年)など, ヨーロッパ, 日本についての集落地理学的論文を発表している。

小川に関する文献として,「著作年譜(抄)」(『近世沖縄の民俗史』所収), 宮口侗迪「小川徹先生の足跡」,「小川徹教授著作目録」(ともに, 久武哲也編『日本における文化地理学の展開』, 1991 年, 所収), 中俣均・竹内重雄・東喜望・鴨澤巖・池宮正治「追悼 小川徹先生」(法政大学沖縄文化研究所所報 50, 2001 年), 中俣均「小川徹先生を悼む」(沖縄タイムス 2001 年 4 月 21 日)がある。

今朝洞重美(けさどう しげみ)(1923.1.17~2001.2.27)

1972 年 4 月, 自然科学教室の助教授として着任。1973 年 9 月より地理学科に移籍。1974 年 4 月教授に昇格。1993 年 3 月退職し, 名誉教授となる。2001 年逝去。1950 年代にも成城学園高校勤務のかたわら兼任教員として勤めていたが, 1958 年 4 月郷里の熊本県に帰って尚綱学園中^{しょうけい}高と熊本短期大学(専任講師)で教鞭をとり, 1963 年 4 月からまた上京して, 実践女子学園中高に勤めながら本学の兼任教員として教えていた(当初は商経学部の所属であった)。

『駒澤大学文学部研究紀要』に「東京における住宅地区の地理学的考察」(1973 年),「東京郊外における高級住宅地の変容」(1979 年)などの論文がある。

長野 覺(ながの ただし)(1928~)

1978 年 4 月, 専任講師として着任。1980 年助教授, 1987 年教授に昇格。1998 年 3 月退職。

代表的著書に『英彦山修験道の歴史地理学的研究』(1987 年)がある。同名の論文によって, 1986 年駒澤大学から文学博士の学位を授与されている。『駒澤地理』,『駒澤大学文学部研究紀要』にも,「日本人の山岳信仰に基づく聖域観による自然護持(その 1)」(1989 年)などの山岳信仰に関する論文がある。

長野に関する文献として, 長野覺『時間と空間と人間の縁』—人生行路の母港は母校—(駒澤大学大学院地理学研究 27, 1999 年)がある。

西村嘉助 (にしむら かすけ) (1916～)

広島大学, 東北大学を経て, 1980年4月教授として着任。1991年3月退職。

編著として『応用地形学』(1969年), 『応用地理学の展開』(1972～1973年), 訳書としてバンジ著『理論地理学』(1970年)などがある。

西村に関する文献として, 「西村嘉助先生略歴」, 「西村嘉助先生著作略目録」(ともに, 西村嘉助先生退官記念事業実行委員会編『西村嘉助先生退官記念地理学論文集』1980年所収), 「西村嘉助先生に聞く」(『続・地理学を学ぶ』古今書院, 1999年所収)がある。

竹内啓一 (たけうち けいいち) (1932～)

一橋大学より1994年4月教授として着任。2003年3月退職。

イタリア研究, 地理思想史, 経済地理学など幅広い分野にわたって著書・編著・訳書がある。在職中には, 『地域問題の形成と展開』(1998年), "Modern Japanese geography" (2000年)などを出版した。『駒澤地理』, 『地域学研究』にも多くの論文・書評が掲載されている。

藤島範孝 (ふじしま のりたか) (1933～)

1964年4月北海道教養部開設とともに, 専任講師として着任(ただし, 教職員住所録では昭和43年度版まで兼任になっており, 『駒沢大学北海道教養部・岩見沢駒沢短期大学十五周年誌』でも1969年から専任とされている)。1972年4月助教授, 1979年4月教授に昇格。北海道教養部廃止によって, 1999年4月地理学科に移籍。2002年3月退職。名誉教授の称号を授与されている。

著書に, 『北海道わらべ唄』(1976年), 『北海道弁』(1983年), 『中国地名の地誌学的研究』(1997年)がある。論文は, 『北海道駒澤大学研究紀要』(後に『駒澤大学北海道教養部研究紀要』)に北海道と中国の特に地名についての研究を数多く発表しているほか, 炭鉱, 商業などに関する論文もある。

b. 北海道教養部の地理学関係専任教員

川添 熙 (かわぞい ひろし) (1897.10.6～?)

1967年4月, 北海道教養部専任講師として着任。1972年3月退職。1972年度は兼任教員として勤めている。東京帝国大学理学部地質学科と同法学部を卒業しており, 戦前は北樺太石油, 北海道炭鉱汽船などに勤めていた。戦後は北海道の高校教員をしていた。北海道教養部では自然地理学概説, 地学概説, 地質学, 地形学を担当した(『駒沢大学北海道教養部・岩見沢駒沢短期大学十五周年誌』掲載の1971年度時間割による)。

学内の紀要類には論文が見られないが, 戦前に地質調査, 鉱区調査の報告を多数書いている。

守屋以智雄（もりや いちお）（1937～）

1972年4月、北海道教養部助教授として着任。1978年教授に昇格。1980年3月退職し、金沢大学文学部に転出した。退職後1年間は、非常勤講師として北海道教養部に勤務している。

著書としては、金沢大学時代に『日本の火山地形』（1983年）を公刊している。『駒澤地理』にも「赤城火山南斜面荒砥川流域の地形と地質」（1973年）、「熔岩円頂丘の地形」（1978年）の論文がある。「日本の第四紀火山の地形発達史」の論文で、1977年に東京大学から理学博士の学位を授与されている。

守屋に関する文献として、守屋以智雄「火山とともに・履歴・研究活動歴」（金沢大学文学部地理学報告10, 2002年）がある。

藤井 享（ふじい すすむ）（1936～）

1980年度1年間、北海道教養部非常勤講師を務めた後に、1981年4月に専任講師として着任。1985年助教授、1991年教授に昇格。北海道教養部廃止によって、1999年4月文学部自然科学教室に移籍。2005年3月退職予定。本来の専門は地理学ではないが、北海道教養部で地理学の専門科目を担当した。

『北海道駒澤大学研究紀要』（後に『駒澤大学北海道教養部研究紀要』）、『駒澤大学北海道教養部論集』に、「北海道における移動性高気圧出現時の気候特性について」、「石狩平野東縁中央部の地形」など、北海道の気候・地形についての論文がある。

c. 自然科学教室の地理学関係専任教員

高木 久（たかぎ ひさし）（1914～）

1962年4月専任講師として着任、1977年3月退職（実態は非常勤講師に近かった）。その後は1986年度まで非常勤講師として勤めた。自然科学教室が設置された1971年度以降は自然科学教室所属であった。『駒澤地理』に「近代工業都市の成長とその問題—京浜工業地帯の事例—」（1960年）という論文がある。

中島義一（なかじま ぎいち）（1926～）

大正大学から1973年9月、自然科学教室専任講師として着任。1974年助教授、1980年教授に昇格。1997年3月退職し、名誉教授の称号を授与される。自然科学教室に所属し、地理学科専門科目を兼任した。

著書に『市場集落』（1964年）がある。『駒澤地理』、『駒澤大学文学部研究紀要』にも、「水戸藩御殿の歴史地理的考察」（1984年）など、定期市、御殿、駅前集落などに関する論文を多数寄せている。

中島に関する文献として、『中島義一 七十年の歩み』（私家版，1997年）がある。

漆原和子（うるしばら かずこ）（1943～）

足利工業大学から1984年4月、自然科学教室助教授として着任。1990年教授に昇格。1999年3月退職し、法政大学文学部に転出した。専任教員として本学に来る前にも、地理学科の非常勤講師として1981年度から教鞭をとっており、本学在任中、法政大学転出後も地理学科専門科目を担当している。

編著に『カルスト』（1996年）、共訳書にブリッジズ著『世界の土壌』（1990年）がある。『駒澤地理』にも石灰岩性土壌などに関する論文を発表している。

d. 経済学部の地理学関係専任教員

上坂修夫（こうさか なお）（1932～）

1966年4月、商経学部（後に経済学部）専任講師として着任。1968年助教授，1974年教授に昇格。1999年3月退職し、名誉教授となる。1965年度は地理の兼任講師として勤務しており、本学着任後も地理学科の専門科目を兼担した。

『駒澤大学経済学論集』に「地域人口の年齢構成変化に関する若干の問題」（1984年）など人口地理学の論文を発表しており、『駒澤地理』にも「ソ連・東欧における農業人口および農業世帯の変動について」（1968年）の論文がある。

e. 地理学科の現在の専任教員

小池一之（こいけ かずゆき）（1935～）

1964年4月、専任講師として着任。1968年助教授，1974年教授に昇格。

著書に『海岸とつきあう』（1997年）、共編著に『日本の自然 地域編 関東』（1994年）、『変化する日本の海岸』（1996年）、『日本の海成段丘アトラス』（2001年）などがある。『駒澤地理』にも、地形に関する論文を寄せている。1968年に「阿武隈山地とその周辺の地形発達」の論文で、東京大学より理学博士（課程博士）の学位を授与された。

長沼信夫（ながぬま のぶお）（1940～）

1964年4月、副手として着任。1966年4月助手。1969年専任講師，1973年助教授，1979年教授に昇格。

『駒澤地理』、『駒澤大学文学部研究紀要』に「横浜南部舞岡川源流域の水収支に関する一考察」（1986年）、「多摩川下流低地における地下水の揚水量と水位変動」（1999年）など、地下水、河川環

境についての論文がある。

早船元峰（はやふね げんぼう）（旧名：阿由葉^{あゆは} 元^{げん}，早船^{はやふね} 元^{げん}）（1944～）

1969年4月、助手として着任。1970年北海道教養部に専任講師として出向。1972年地理学科に戻り、1977年助教授、1985年教授に昇格。

『駒澤地理』、『駒澤大学文学部研究紀要』に、「富良野市麓郷における土地利用の変化と土壌侵食」（1980年）、「多摩川上流山村における土地利用と水利用について」（1987年）など、土地利用、地下水等についての論文がある。

高木正博（たかぎ まさひろ）（1947～）

1973年4月、助手として着任。1977年専任講師、1982年助教授、1988年教授に昇格。

『駒澤地理』、『駒澤大学文学部研究紀要』に、「多摩川下流域における土地利用の変化と農業用水」（1984年）、「葛飾・江戸川区の水路について」（1990年）など、都市用水、農業用水についての論文を発表している。

中村和郎（なかむら かずお）（1934～）

東京都立大学から1984年4月、教授として着任。2005年3月定年退職予定。1975年度から兼任（非常勤）講師を務めていた。

著書に『雲と風を読む』（1991年）、共著に『日本の気候』（1986年、1996年新版）、『地域と景観』（1991年）など、その他にも共編著が多数ある。また、本学着任前の共訳書として、スタンプ著『生と死の地理学』（1967年）がある。

土谷敏治（つちたに としはる）（1955～）

1987年4月、専任講師として着任。1992年助教授、1998年教授に昇格。

『駒澤地理』に、「ドイツ連邦共和国における鉄道交通システムとその変化」（1992年）、「地方私鉄の現状と課題」（1997年）など、鉄道、人口移動に関する論文がある。

小田匡保（おだ まさやす）（1960～）

1990年4月、専任講師として着任。1994年助教授、2000年教授に昇格。

『駒澤地理』、『地域学研究』に「大和国絵図に描かれた大峰」（1998年）、「戦後日本の宗教地理学」（2002年）など、宗教地理学や絵図などについての論文を書いている。

佐藤哲夫（さとう てつお）（1957～）

三重大学から1991年4月、専任講師として着任。1992年助教授、1998年教授に昇格。

共訳書として『図説大百科世界の地理 21 東南アジア』（1997年）がある。『地域学研究』に、「タイ国ソクラー湖周辺における環境の変化と対策」（2001年）など、東南アジアについての論文を発表している。1993年に、「A Geographical Study on Farming Systems in Rice Growing Regions of Asia」（アジアの稲作地域におけるファーミングシステムの地理学的研究）の論文で、東京大学より博士（理学）の学位を授与された。

橋詰直道（はしづめ なおみち）（1951～）

1993年4月、専任講師として着任。1997年助教授、2003年教授に昇格。

『駒澤地理』に、「千葉県下の自治体における都市緑地保全法の適用による市街地緑地の保全」（1994年）、「イングランドにおけるガーデン・ヴィレッジとガーデン・サバープ」（2000年）など、都市緑地についての論文を発表している。

櫻井明久（さくらい あきひさ）（1948～）

大阪教育大学、宇都宮大学を経て、1998年4月、教授として着任。

著書に『地理教育学入門』（1999年）、着任前のものとして『西ドイツの農業と農村』（1989年）がある。

須山 聡（すやま さとし）（1964～）

1998年4月、専任講師として着任。2000年助教授に昇格。

著書に『在来工業地域論』（2004年）がある。『駒澤地理』、『地域学研究』にも、「人口・産業構造の特性に基づいた日本における島嶼の地域類型」（2003年）など、在来工業、離島研究の論文を発表している。

田中 靖（たなか やすし）（1973～）

2002年4月、専任講師として着任。

『GIS:理論と応用』に「GISと画像処理による斜面崩壊地抽出法の開発と発生様式の定量的検討」（2000年）、『活断層研究』に「活断層研究への数値標高モデルの応用」（2002年）などの論文がある。2004年12月に、「Geomorphometrical study on erosion processes in a mountain drainage basin using high-resolution digital spatial data」（高解像度空間情報データを用いた山地流域の侵食過程に関する地形計測学的研究）の論文で、東京大学より博士（理学）の学位（課程博士）を授与された。

高橋健太郎（たかはし けんたろう）（1973～）

2003年4月、専任講師として着任。

『地域学研究』に「回族・漢族混住農村の社会構造と居住地の形態」（2000年）、『経済地理学年

報』に「回族・漢族混住農村におけるエスニシティと経済活動」(2002年)などの論文がある。

(5) 大学院生の研究活動

大学院生の研究活動については大学院の節でも詳しく述べるが、ここでも簡単に触れておく。日常活動としては、卒業論文発表会、修士論文中間発表会などの研究発表会や巡検を自主的に行ない、学生相互で討議を重ねている。また、駒澤大学大学院地理学研究会を発行者として毎年『地理学研究』を発行している。『地理学研究』の目次は後掲の表 3-2-13 のとおりである。

(6) 公開講演会

地理学科では、応用地理研究所との共催で年3回公開講演会を行なっている。地理学や周辺学問の研究者を講師に招き、学部生でも理解できるレベルの講演をお願いしている。地理学科学生の他に、他学部・学科教員や他大学学生、一般の方々も来聴している。記録の残っている1981(昭和56)年度以降の開催内容は、後掲の表 3-4-2 のとおりである。

(7) 地理学談話会

1998(平成10)年度から地理学科では、当時の学科主任竹内教授の発案で、大学院生と共催の地理学談話会を不定期に開催している。地理学科スタッフの在外研究・海外出張報告や新任スタッフの研究紹介、大学院生の研究発表が主である。学問的な話題をなごやかな雰囲気でも語り合おうというのが談話会の趣旨であり、第一研究館特研2の部屋で行なわれている。学部生にも熱心な参加者がいる。これまでの開催内容は後掲の表 3-4-3 のとおりである。